

前回個人研究発表まとめ

認識的外在主義と推論

——《推論がアприオりに正当化されること》という観点から

小倉 翔（本学社会学研究科博士後期課程）

本発表は、「一般性論証」への可能な反論を一つ取り上げその反論が的確であるかどうかを検討するものであった。「一般性論証」とは、「アприオリな正当化は《経験から経験を越え出るような結論へ推論をすること》にとって不可欠である」という論証である。この「一般性論証」は Laurence Bonjour によって「アприオリなものが存在する」ということを示す論証として提出された。すなわち、Bonjour に

よって提出された「一般性論証」は「アприオリな正当化は認識論的に不可欠である」と主張するのである。

本発表において取り上げられたのは「一般性論証は特に認識的内在主義を仮定するときにしかうまくいかない」という趣旨の反論である。これはアприオリな正当化についての二つの区別に関係して提起されるタイプの反論である。一般性論証は《肯定的な意味でのアприオリな正当化》を《推論をすること》にとって不可欠であると結論するものとして理解されるが、しかし《否定的な意味でのアприオリな正当化》が理論的には可能であって、それは「推論をすることについての外在主義」である。そして「こうした種類のアприオリな正当化の可能性が残されるから、一般性論証は切り崩される」と言われるのである。

このタイプの反論が的確であるかどうかを検討するに際して、本発表では次のような種類の外在主義が想定された。すなわち、《推論をすること》のうちのいくつかは——問題の個人が気づけるような理性的洞察／理解を必要とすることなしに——たんに「その推論が事実上信頼可能ないし妥当である」という事実のおかげで正当化される、という見方（(Externalism 1)）である。

これに対し、本発表では次のような結論を示した。すなわち、「指摘された外在主義的理論は、論理的に可能な理論ではあるけれども、《どのようにして推論をすることが（否定的な意味で、つまり、経験に依存しないという意味で）アприオリに正当化され得るのか》についてのもっともらしい説明ではない」ということである。これをもって本発表は「しかし肯定的なもの——理性的洞察／理解にのみ依存するアприオリな正当化——は他の唯一のオルタナティブな説明としてもっともらしいように見える。それゆえ一般性論証は《肯定的な意味でのアприオリな正当化》の存在を信じることを支持する」ように見えるということを主張した。

質疑応答に際しては異分野の方からも含め、大変有益なご意見・ご質問をいただいた。

そのうち、より専門的と思われるご意見・ご質問としては二つあった。一つは、現実の外在主義者は(Externalism 1)をとらないのではないかとのご指摘である。これに対しては、確かに現実の外在主義者は(Externalism 1)をとらないだろうが、しかし今回の発表にプラスして、今回の発表では検討対象外とされたようなタイプの外在主義（(Externalism 2)）への反論が将来的に実行されたならば——(Externalism 2)をとる外在主義者としては Harman や Wright などが現実に存在するので——実際に存在する外在主義者への反論になり得るだろうと回答した。

もう一つは、いわゆる「一般性問題」に係わるものであった。すなわち、外在主義者は本発表で(Externalism 1)がうまく回避することができないとされたような《とんでもなく証明するのが複雑な推論をすることが正当化されること》を、信頼できる認知的プロセスを特定することによって避けられるのではないかとのご指摘をいただいた。これに対しては、「一般性問題」をどのようにして外在主義者は解決し得るのかと応答した。